

山本真鳥先生の定年退職をお祝いして

著者	鈴木 豊
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	88
号	3
ページ	1-4
発行年	2021-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00024134

山本真鳥先生の定年退職をお祝いして

経済学部長 鈴木 豊

山本真鳥先生は、東京大学教養学部 教養学科文化人類学分科 を 1974 年 3 月に卒業され（教養学士）、同大学院 社会学研究科 文化人類学専攻へと進学された後、1976年 3 月に社会学修士を取得されました。その後、博士後期課程へ進んで1981年 3 月に同課程を単位取得満期退学し、日本学術振興会奨励研究員を 2 年間務められたのち、1984年 4 月に、法政大学経済学部にて助教授として着任されました。多摩キャンパス開設と時を同じくして、ということになると思います。先生は、1990年 4 月に経済学部教授に昇格され、就任以来37年間一貫して、ご専門である「文化人類学」を担当され、就任後ほどなくして、「経済人類学」も講じられるようになりました。また、法政大学の在外研究員として、カリフォルニア大学バークレー校人類学部（1990年 8 月～1992年 8 月）、ハワイ大学マノア校 人類学部（2011年 3 月～2012年 2 月）にて研究されたほか、ご専門のオセアニア地域を調査研究するためのフィールドワークを中心に、グローバルな研究活動を、毎年のように展開されてきたものと拝察いたします。そして、40年におよぶ調査研究の成果を「グローバル化する互酬性—サモア世界の儀礼財の循環と首長制—」としてまとめられ、2017年 3 月に、総合研究大学院大学（総研大）より、博士（文学）学位を取得されました。

先生のご専門は、今述べた「オセアニア地域の文化人類学研究」でいらっしゃいますが、非常勤講師のご経歴を拝見しましても、東京大学教養学

部教養学科，東京大学教育学部，東京大学大学院教育学研究科，お茶の水
大学文教育学部，東京都立大学大学院社会科学研究科，国立民族学博物館，
国際基督教大学教養学部，東北大学文学部，東京外国語大学国際社会学部，
同外国語学部，放送大学大学院等にて，何度も講師を担当されております
ので，この分野に関して，余人をもって代えがたい，深いご見識をお持ち
の研究者であることが分かります。

先生は，学部，大学院時代から，一貫して，文化人類学のご研究を続け，
研究テーマについて深めて来られたわけですので，専門外の私が，この短
いスペースで何か言及するのは不可能に近いですが，学部長として，ご慰
労と感謝の意を込めて，何か私なりのメッセージを添える必要があると考
えます。そこで，「法政大学学術データベース」の先生のページ等を参考に
して，恐らくは，先生の研究の根幹にかかわっていて，私も経済学者とし
て大変興味をかき立てられた箇所を取り上げさせていただきたいと存じま
す。（面白い研究にはコメントせずにはいられないという，学者特有の性を
ご海容頂ければ，と存じます。）

先生は『儀礼としての経済—サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』
（共著1996年）にて，綿密なフィールド調査に基づいた分析を通して，儀
礼交換の基本構造からサモア社会の基本原理を描こうとされ，博士論文を
基に出版された『グローバル化する互酬性—拡大するサモア社会と首長制
—』（単著2017年）では，伝統の互酬的儀礼交換が，移民社会からサモア
本国への送金と，その逆に移動する儀礼財（フィン・マツ）と名誉あ
る称号名の贈与に変容していく様相，すなわち，互酬性がグローバリゼー
ションに対応するメカニズムを，長年のフィールド調査を基に解明されま
した。要は，40年近いタイムスパンで移民のトランスナショナルな活動に
よって拡大してきたサモア世界において，ダイナミックに変わってきた部
分と，それと同様に変わらない部分とを明らかにされたのだと思います。
文化人類学における贈与交換論と首長制が，グローバルな文脈において，
いかに位置づけられるのか。フィン・マツを用いた盛大な儀礼交換が，

サモア人海外移民と本国居住者を巻き込みながら、いかなる展開を見せているのかを分析され、政府の政策等によって、儀礼交換の規模や、ファイン・マットの質や形状の変化を伴いながらも、「世界中に広がるグローバルなサモア人社会を結びつけている儀礼交換は、それなりの機能があり、形をかえてサモア社会に生き延びていくのであろう。」と結論づけられています。

私は、山本先生は、フィールドワークによる綿密な調査を主たる研究方法としながらも、構造的モデル、経済学で言う「理論化」への志向がかなりおありなのだ、と感じました。「トランスナショナルな贈与交換による移住者と本国住民との互酬関係のモデル」は、サモアに限らず、現代の移民研究に対して重要な視角を提示していると思いますし、私も分野と分析手法こそ違え、2020年1月に上梓した『中国経済の制度分析：契約理論・ゲーム理論アプローチ』という著書の前書きに、「(略) さらに言えば、中国以外の途上国経済について、本書と同様な分析を適用する途を開く嚆矢ともなりうると期待できよう。」と書いた、特殊から一般への適用可能性の問題意識です。

また、私の専門であるゲーム理論には、社会学におけるゲーム理論研究があります。今回、先生の研究を拝見させて頂きましたが、サモア社会の儀礼交換は、経済的な財（現金）と社会的なシンボル（ファイン・マットや称号）の交換を伴うトランスナショナルな社会交換（互酬）のゲームですので、本国における伝統的な儀礼交換の部分とも合わせて、それらが相互に影響を及ぼし合いながら、時間を通じてどのように変化していくかという問題として「進化ゲームの枠組み」などでアプローチすることができるのではないか、と思いました。もちろん、先生は、40年に及ぶ綿密なフィールドワーク調査の上で、構造的一般化のインサイトを導出されたので、慎重に考えるべきところではありますが、コメントとして、ご容赦いただければ幸甚です。

いずれにしても、今回、先生のご研究には時間を通じた進展や深み

を感じさせられました。先生は、研究者として、一貫したテーマで研究活動を続けて来られ、納得の行く形で、定年退職をお迎えになられたのではないかと、思います。私も、この3月で2期4年間にわたる学部長職を任期満了することになりましたので、退職記念号への巻頭言を書かせて頂くのも、これが最後になります。私は退職まで、あと10数年間ですが、「納得いく形で終えたい。悔いの残らないように研究を全うしたい。」という思いを強くしました。感謝申し上げます。

さて、巻頭言ですので、先生との学部教授会における思い出話も一つ書いておくべきでしょう。先生は覚えておられないかもしれませんが、私が教授会副主任だった2004年の時に、学生委員会座長を務めて下さり、学生問題への対応において、大変お世話になりました。「厳罰処分」を下すことになった案件に対しても、当時の私は、教授会での説明や、その後の訴訟リスクなども思い浮かび、びくびくしていましたが（笑）、山本先生は座長として、毅然とした態度を取られ、大変心強く思ったことを覚えております。先生は、学部教授会においても、1995年に教授会副主任、2005年に教授会主任を務められ、御多忙な中でも教授会運営に貢献されてきました。

山本先生が、経済学部の女性教授陣のリーダー的存在であったことも誰もが認めるところであったと思います。といっても、尖った感じではなく、明るくさっぱりしたお人柄にも、皆、どこか親しみを感じていたように思います。「まとり先生」とお名前と呼ぶ同僚や後輩が多かったことから、皆に慕われ、信頼されていたことが分かります。

教育研究、そして入試体制などにおいて、中心的存在でいらした山本真鳥先生が定年退職されてしまうことは、経済学部としては痛いところではありますが、今後、新たな人材採用も含めて、皆で頑張っていきたいと存じます。先生、37年間、お疲れ様でした。これからもお元気でご活躍されることを期待しております。